

第六十六振武隊後藤光春大尉の出撃基地 に関する考察

田代 良民

はじめに

このたび、知覧特攻慰霊顕彰会は、平成十六年から発行している冊子『魂魄の記録』を改訂し第七版を出版した^{〔注〕}。同書籍は、陸軍沖縄戦において散華された特攻隊員の方々の名簿や、知覧基地の概要、手紙や遺書等の写真、活字等を掲載しており、知覧特攻平和会館ロビーカウンターで販売している。今回の改訂にあたり、各陸軍基地から出撃した特攻戦没者の人数に関して検証した(表1・図1)。

表1 出撃人数(『魂魄の記録』より)

	出撃基地	人数
鹿児島県	知覧	402
	徳之島	14
	喜界島	23
	万世	120
宮崎県	鹿屋	12
	都城東	73
	都城西	10
熊本県	新田原	38
	健軍	127
	菊池	1
山口県	大刀洗	14
	蓆田	4
	小月	2
沖縄県	沖繩	20
	石垣	31
	宮古	10
台湾	宜蘭	37
	台中	31
	八塊	32
	桃園	15
	花蓮港	15
	竜潭	5
	合計	1036

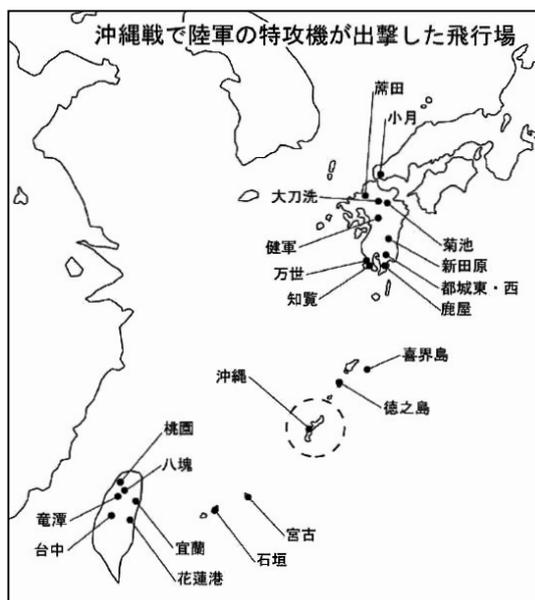


図1 位置図(『魂魄の記録』より)

特攻隊員の付属情報は、知覧特攻平和会館の隊員情報システムデータベース等による新しい知見を反映させたが、出撃地に関しては、前版を踏襲している。だが筆者は、万世基地とされている第六十六振武隊の後藤光春大尉(戦死後の階級)の出撃基地については以前から疑問を抱いている。従来、後藤大尉は万世基地からの出撃とみなされる一方で、僚機として出撃した伊東輝友大尉(戦死後の階級)は知覧基地とされ矛盾が生じており、各文献においても相違がみられるためである。今回、筆者が諸資料を基に検証した結果、知覧基地からであったと結論付けることができた。本稿は、検証に用いた各文献の記述を提示し、なぜ万世とされてきたのかを整理したうえで、知覧であったと結論付けられる根拠を報告し、次回改訂において修正することを提唱するものである。

なお、本稿は知覧特攻慰霊顕彰会事務局兼知覧特攻平和会館管理組合語り部である筆者の個人的見解であり、後藤大尉が万世基地に所縁のあったことを否定する意図はないことは申し添えておきたい。

一・問題提起

(1) 経緯

今回の検証の契機は、令和三年三月一日発行の『特攻基地鎮魂の譜 よろずよに』^(注2)を手にしたことによる。「第十一章 万世から出撃した特攻隊員」「七 第六六振武隊員名」(二三九頁)の一覧にある次の記載に目が止まった。

・後藤光春大尉の備考欄の記載

「伊藤(筆者注・東)輝友大尉と出撃し、沖縄周辺洋上にて散華」

・伊東輝友大尉の備考欄の記載

「後藤大尉と出撃。遺族の希望で知覧平和会館に合祀。否合祀の為に細字で表記」

同書からは、二人とも万世から出撃した隊員として一覧に掲載しているものの、伊東大尉は遺族の希望により知覧からの出撃として取り扱うということがうかがえた。筆者は、知覧特攻慰霊顕彰会事務局及び知覧特攻平和会館組合の語り部として、この問題を整理しておく必要性を認識した。そこで、万世基地に関する文献として、万世特攻平和祈念館の設立に尽力された、苗村七郎氏の著書を調べた。

○苗村文献①『慰霊戦記 よろずよに―最後の陸軍特攻基地』^(注3)

万世基地から出撃した第六六振武隊の欄には、後藤大尉・伊東大尉の名前はない(四九五頁)。日付けごとにまとめた資料でも、五月二十五日の欄には、

「この日知覧・万世・都城東より七〇機が出撃し、そのうち突入したものは二四機であった。万世基地よりの特攻隊は第四三二振武隊(九七戦) 矢内廉造伍長ほか一機、第四三三振武隊(九七戦) 三瀬七郎少尉ほか四機であった。」

その下に隊員名が記されているが、両名の名はない(四九五・五二九頁)。

○苗村文献②『万世特攻隊員の遺書』^(注4)

日付ごとに、陸軍特攻隊の出撃状況がまとめられている。五月二十五日の欄には次のように記載がある。

「第六六振武隊」後藤光春(少尉、57期)、伊藤(筆者注・東)輝友(予備少尉、特操1期)、『九七戦』知覧出撃。(四五八・四五九頁)

○苗村文献③『陸軍最後の特攻基地 万世特攻隊員の遺書・遺影』^(注5)
日付け順に記載があるが、ここで変化が生じている。

「第六六振武隊」後藤光春(少尉、57期)、伊藤(筆者注・東)輝友(予備少尉、特操1期)、『九七戦』知覧か万世出撃。(五一五頁)

苗村文献①の万世からの出撃者の中に後藤・伊東両名は含まれておらず、苗村文献②で「知覧出撃」と記載していたものが、苗村文献③では「知覧か万世」という表現に変化がみられた。その理由は示されていないが、次に挙げる二つの文献を参考にしたためと推測される。

(2) 『戦史叢書』と『陸軍特別攻撃隊史』の差異とその影響

○生田文献①防衛庁防衛研究所戦史部編『戦史叢書』^(注6)

同書は、戦時中の軍事史を紐解く際の手引き書のような存在のものである。「第三編第四章 航空総攻撃の続行」の項の五月二十五日の記述から抜粋する(波線は筆者付加による)。

「五月二十五日は低気圧が東シナ海を南東進し戦場全般に天候不良であった。義号作戦は既述のようにおおむね成功し、沖縄敵飛行場の敵機を制圧したが、その成果を利用すべき二十五日の航空攻撃は遺憾ながら天候不良に妨げられ十分な成果を發揮できなかった。」

二十五日の総攻撃に備えて第六航空軍が準備した特攻機は一二〇機であったが、〇七〇〇ころ以降沖縄は雨で視界がはだだ悪く、一二〇機の特攻機中で発進できたものは伎倆に自信ある七〇機にとどまり、そのうち突入を報じたものは二四機に過ぎなかった。多大

の日時と努力と人的犠牲を費やして遂行した義号作戦の成果も半ば空に帰した感があった。

この攻撃に参加突入した特攻隊は次の諸隊であった。

- 第二十六振武隊（四式戦） 梅津末雄少尉ほか一機 知覧
- 第二十九振武隊（一式戦） 益子 博伍長ほか一機 〃
- 第四十九振武隊（一式戦） 南部吉雄少尉ほか一機 〃
- 第五十 振武隊（一式戦） 高橋 暉少尉ほか一機 知覧
- 第五十二振武隊（一式戦） 中原常信少尉ほか四機 〃
- 第五十四振武隊（三式戦） 葛西 宏少尉ほか五機 〃
- 第五十五振武隊（三式戦） 佐伯 修少尉ほか一機 〃
- 第五十六振武隊（三式戦） 小澤幸夫少尉ほか一機 〃
- 第五十七振武隊（四式戦） 伊東喜得少尉ほか一機 〃
- 第五十八振武隊（四式戦） 高柳 隆少尉ほか九機 〃
- 第六十六振武隊（九七戦） 後藤光春少尉ほか一機 知覧
- 第七十 振武隊（一式戦） 三村龍弘伍長ほか二機 〃
- 第七十八振武隊（九七戦） 樺島資彦少尉ほか二機 〃
- 第五 振武隊（九七戦） 仲西久雄伍長ほか一機 〃
- 第四百三十二振武隊（九七戦） 矢内廉造伍長ほか一機 萬世
- 第四百三十三振武隊（九七戦） 三潮七郎少尉ほか四機 〃
- 飛行第六十二戦隊 溝田彦二少尉ほか一機 大刀洗
- なお第六十振武隊（四式戦）、第六十一振武隊（四式戦）の各一機がこの日の攻撃で突入した。

通信情報によるこの日の総合戦果は、艦種不詳四隻を轟沈または撃破し、艦種不詳五隻を撃破したと報じた。（五七五・五七六頁）

○生田文献②生田惇『陸軍特別攻撃隊史』（注7）

二つ目の文献は、防衛庁防衛研究所戦史部所属で戦史叢書の編者、生田惇氏が著した『陸軍特別攻撃隊史』である（注7）。「第4章 沖繩作戦

における特攻」3 義号作戦と第八次航空総攻撃」の「航空総攻撃の不調」の項を抜粋する（波線は筆者付加による）。

「義烈空挺隊の突入によって、沖繩米軍の通信は混乱していた。二十五日の総攻撃に備えて第六航空軍が準備した特攻機は百二十機であった。まさに攻撃の好機である。しかし残念にも天候が悪化した。午前七時以降は沖繩は雨で視界が極端に悪くなった。それでも伎倆に自信のある隊員七十機が九州各基地を発信した。しかし、そのうち突入の電報を発したのは二十四機にとどまった。

二十五日の特攻戦没者は次のとおりである。

- 第二十六振武隊（知覧・〇六五二） 梅津末雄、小林位少尉
- 第二十九振武隊（知覧） 益子博、美濃輝雄伍長
- 第四十九振武隊（知覧） 南部吉雄、黒川久雄少尉
- 第五十振武隊（知覧・〇五四五） 高橋暉、藤田典澄少尉
- 第五十二振武隊（知覧・〇五〇〇） 中原常信、荒川宣治、谷苗菊夫、市川実少尉、太田増信伍長
- 第五十四振武隊（知覧） 葛西宏、三島邦夫、内海京一郎、大越道明、坂内隆夫、松本薫少尉
- 第五十五振武隊（知覧・〇五〇〇） 佐伯修、菊地誠少尉
- 第五十六振武隊（知覧） 小沢幸夫、鈴木重幸少尉
- 第五十七振武隊（都城東・〇五〇〇） 伊東喜得、戸沢吾郎、唐沢鉄次郎、吉川富治少尉、小林昭二、志水一、高埜徳、西田久、山下孝之、青木清二、棧武夫伍長
- 第五十八振武隊（都城東・〇五〇〇） 高柳隆、上田徳、高田光太郎、富永靖、西村閏二、宮毛克彦少尉、国吉秀俊軍曹、今村岩美、栄瀧志、藤山恒彰伍長
- 第六十振武隊（都城東・〇六五二） 向井忠伍長
- 第六十一振武隊（都城東・〇五〇〇） 荒井武夫伍長

表2 後藤・伊東大尉の出撃基地に関する記載の変遷

※ () 内は出撃地

昭和45 (1970) 年	・生田文献①『戦史叢書』(知覧)	
		⇓
昭和49 (1974) 年	・苗村文献①『よろずよに』(知覧)	
昭和51 (1976) 年	・苗村文献②『万世特攻隊員の遺書』(知覧)	
昭和52 (1977) 年	・生田文献②『陸軍特別攻撃隊史』(万世)	
		⇓
平成5 (1993) 年	・苗村文献③『陸軍最後の特攻基地』(知覧か万世)	
平成16 (2004) 年	・知覧特攻慰霊顕彰会編『魂魄の記録』後藤大尉 (万世) 伊東大尉 (知覧)	
平成26 (2014) 年	・『知覧特攻基地戦没者慰霊祭第60回祭記念誌』(知覧)	
令和3 (2021) 年	・万世特攻慰霊碑奉賛会編『よろずよに』後藤大尉 (万世) 伊東大尉 (知覧)	

第六十六振武隊 (万世) 後藤光春、伊東輝友少尉
第七十振武隊 (知覧) 朝倉岩次、藤田文六、三村竜弘伍長
第七十八振武隊 (知覧・〇五〇〇) 樺島資彦、土谷恭三、内藤寛次郎少尉
第五百振武隊 (知覧) 仲西久雄、服部武雄伍長
第四百三十二振武隊 (万世・〇六二六) 増淵松男、矢内廉造伍長
第四百三十三振武隊 (万世・〇七三〇) 三瀬七郎、上島博治、大塚要、大島浩、浪川利庸少尉
飛行第六十二中队 (四式重一さくら弾・大刀洗・〇六〇〇) 溝田彦二、福島豊少尉、山中正八見習士官、大川実、田中弥一、高尾峯望、山下正辰、永野和男伍長 (二〇五・二〇六頁)

どちらも、生田氏の編著によるが、第六十六振武隊の後藤大尉・伊東大尉の出撃基地は知覧から万世へ修正されている。生田氏は、陸軍航空学校第五十五期生で、終戦時は航空士官学校区隊長、陸軍大尉であった(同書奥付に記載)人物である。この『戦史叢書』と『陸軍特別攻撃隊史』という二つの文献における差異が、その後の文献において、知覧と万世の記載が混在する一つの要因となった。すなわち、苗村文献③では「知覧か万世」と記載され、知覧特攻慰霊顕彰会編『魂魄の記録』と万世特攻慰霊顕彰碑奉賛会編『よろずよに』では後藤大尉は万世、伊東大尉は知覧と、同日に同じ部隊として出撃しながら別々の基地名で記載されるようになったとみられる(表2参照)。

なお、知覧特攻慰霊顕彰会事務局や知覧特攻平和会館管理組合語り部の間では、数年前から、後藤大尉はやはり知覧基地からの出撃であったのではないかという議論が交わされていた。平成二十六(二〇一四)年に知覧特攻慰霊顕彰会が発行した『知覧特攻基地戦没者慰霊祭第六十回祭記念誌』の名簿(注8)では、後藤大尉の出撃基地を知覧と記載している。

(3) 問題点

さて、この問題の発端は、生田文献①と②における基地名の違いにあり、根拠が示されていないため苗村文献③では「知覧か万世」とされ、後に知覧特攻慰霊顕彰会と万世特攻慰霊碑奉賛会がまとめた書籍においては、後藤大尉が万世基地、伊東大尉が知覧基地とされた。さらには、知覧特攻慰霊顕彰会の記念誌で知覧基地と統一記載しながらも、知覧特攻平和会館データベースでは、両名とも万世基地と入力されたままという事実もあり、記録や情報が混乱していたというのが実状である。

また、加藤拓氏がまとめた『陸軍航空特別攻撃隊各部隊総覧』(注9)でも、後藤大尉と伊東大尉は「万世より沖繩周辺洋上へ出撃←特攻戦死」と記されている。

二．検証作業

前提として、筆者は一次資料にあたっては断つておかないことは断つておく。既刊の文献等に掲載されている以下の資料をもとに検証した。

(1) 後藤光春大尉の日記と、元六十六振武隊員の証言

後藤大尉の弟にあたる後藤慶生氏のまとめた『流星一瞬の人生 後藤光春の実録』に掲載されている^(注10)。「兄が書いた最後の日記」として昭和二十年四月一日から五月二十五日までの日記を転記している。その一部を抜粋する。

「五月十六日 三時半起床 四時半飛行場へ出発ハ五時ノ予定 佐方・増田・松尾ノ三機出発 十七半 後藤・金子・伊東・中村ノ四機出発 知覧ニ前進 申告終リ宿舎ニ入りシハ二十一時

五月十七日 加藤・伊東・福佐・少尉ノ代機ノ試運転 試験飛行実施ノ予定ナリシモ風強キ為中止 午後加藤・福佐 両少尉来リ代機 知覧ニテ受領

五月十八日 十七時五十分 陸軍大臣 阿南大将来場 訓示 二十三時命アリ「集団ハ明十九日薄暮時、第八次総攻撃ヲ実施」「六十六振 四百三十二振ハ明十九にち払暁時万世飛行場ニ前進シ、夕刻攻撃ノ為ノ発進ヲ準備スベシ」「六六戦隊長ハ到着後発動準備ヲスベシ」

五月十九日 三時半 起床 四時半集団長(今津大佐) 殿ヨリ作命ヲ受ク 五時 知覧出発 万世ニ至ル 佐方機故障ノ為残留 加藤機ネ庄フレ(落下タンク)トノ事デ、尾櫓ヲ突キ上ゲシ増田機 コノ両少尉 知覧ニ引キ返ス。十一時増田少尉来ル飛行機無イトノ事故

障機修理成ル「本十九日十三時二十分ノ出撃ハ一時中止」トノ命令 十一時受ク 落胆ス

五月二十日 本日ハ午前・午後共ニ整備ヲ為ス 飛行機ノ調子良好 十二時頃知覧ヨリ佐方・加藤の二機来ル、コレデ 計九機 集合ス。

五月二十一日 雨天ノ為 本日モ出撃出来ズ 午前中ハ航法計画ヲ実施ス。

五月二十二日 雨天 随時 出動ノ準備アルベシ

五月二十三日 晴天 全 前

五月二十四日 晴天 随時出動

五月二十五日 【最後の日 運命の絶筆】

※【】部分は、転記した後藤慶生氏の付記したものと推測。

※横に、日記の五月二十五日の記述部分の写しが掲載されている。

「五月廿五日

楠公祭

(筆者注…イラスト)

後藤慶生氏は日記の記述をもとに、それまで後藤大尉は知覧基地からの出撃といわれてきたことに対し、「亡兄の出撃最後の地は万世だった。お陰で確認出来ました。」とされている(六六〇六一頁)。

しかし、後藤大尉と共に出撃し生き残った元隊員の証言からは異なる証言を得ていたことが同書に書かれているので以下に抜粋する。

『知覧より出撃、万世ではありません』この言葉を耳にしたのが平成六年十二月二十一日お昼過ぎ 私は田浦様との初対面の時、田浦様宅にて縁戚で偶然 元六十六振武隊員で奇跡の生還をされた元S少尉に電話を通じて衝撃的な言葉を聞いて愕然としたのです。この書殆ど出来上がった時で、同月四日 読売新聞にて明確に最後の出撃場所《万世》と確認の報道がされて 僅か二週

りを、その奥さんに託したのです。奥さんは書状と遺髪だけは直ぐに郵送して下さり、遺品は帰京後わざわざお届け下さいました。その折のお話によれば、輝友は出撃間際にも拘わらず浪速節・都々逸を散々唄い冗談などとばし、出撃して行ったので、あの分じゃきっと一度は帰って来る、と奥さんは思われて二時間も三時間も飛行場周辺で待っていたのですが……というお言葉でした。」
(三三三～三三四頁)

川崎少尉は、昭和二十(一九四五)年五月三十日に試験飛行で知覧基地を離陸した後、鹿児島県内にある郷里の町の土手に墜落死した。それまでも十一日、二十四日、二十八日出撃したがエンジン不調などで引き返していた。その間、「川崎少尉の奥さん」(実際には両親の反対により未入籍)は知覧の町に滞在していたエピソードがある(注12)。

伊東大尉の遺書は五月二十四日の日付であることと、知覧に滞在していた「川崎少尉の奥さん」を経由して遺書や遺品が伊東大尉の家族の元へ届けられている。このことから、伊東大尉は知覧基地から出撃した可能性が高いと考えられる。

(3) アジア歴史資料センターの公開資料

これまで、先述した二つの資料、後藤大尉の弟と伊東大尉の兄が書いたそれぞれの手記を根拠に、後藤大尉は万世基地から、伊東大尉は知覧基地から出撃したという相反する見方がなされ、知覧特攻慰霊顕彰会編『魂魄の記録』や万世特攻慰霊碑奉賛会編『よろずよに』ではそのように記載されてきた。また、後藤大尉の日記を尊重した場合に、知覧特攻平和会館の隊員情報データベースや加藤拓氏がまとめた『陸軍航空特別攻撃隊各部隊総覧』では両名とも万世基地からの出撃と見なされてきた。

今回筆者は、国立公文書館アジア歴史資料センター公開資料の「感状に関する綴 昭和二〇・五〇八」の中に、第六十六振武隊の戦闘概要の

報告が収められていることを確認した(注13)(図2参照)。

この資料から、以下のことが読み取れる。

- ・五月二十五日の出撃は、後藤光春少尉(当時)が隊長、伊東輝友少尉(当時)が隊員の二人である。

- ・発進基地、期日、時刻の記載欄には、「知覧 5/25 0530」とあり、知覧基地を早朝五時半に出撃したことがわかる。

- ・「戦闘概要」の欄には「五月二十五日〇五三〇知覧発進〇八三〇

一〇九〇〇ノ間沖繩島南部周邊ノ敵艦船索メテ特別攻撃決行セリ」と記されている。

このように軍の公式な記録に「知覧」と記されていることは、これまで見落とされていた。筆者は、日記や証言などの個人的な記録・記憶だけでなく、軍の資料の中に存在する文字資料も、出撃基地を検証する上での重要な要素として捉えたい。

(4) 参考資料…訓示を聞く写真

そのほか、検証作業に用いた資料に、出撃前の訓示を聞く特攻隊員が整列する写真がある。最前列に後藤光春大尉が並んでいる。この写真は、知覧特攻平和会館管理組合の前任の語り部が当時の写真を収集していたスクラップ帳の中にあつた複写写真である。五月二十三日に菅原中将が知覧で訓示をした際に撮影されたものと前任者からは伝わるが、後藤大尉の日記では五月十八日に阿南陸軍大臣の訓示の記述はあるものの、五月二十三日には訓示の記述はない。二十三日に撮影されたものであるとすれば、その日に知覧基地で出撃の準備をしていたことを傍証するものとなるが、複写した写真の原本が不明であることから今回は取り上げず、今後の研究に委ねたい。

三、結び

検証作業の結果、以下の理由より第六十六振武隊の後藤大尉・伊東大尉ともに知覧基地から出撃した可能性が高いと考えるに至った。

理由① 軍の記録の中に第六十六振武隊の戦闘報告があり、知覧基地から出撃したことが記録されていた。

理由② 伊東大尉が五月二十四日に書いた遺書は、知覧に滞在していた「川崎少尉の奥さん」が預かり家族へ届けられた。

理由③ 第六十六振武隊の元隊員であったS少尉は、当初、後藤大尉は知覧基地から出撃したと証言していた。

しかしながら、後藤大尉の日記では五月十九日に万世へ移動して以降、知覧へ戻ったとの記載がないことをどう解釈するかという点で課題が残る。何らかの事由により記載されなかったのか、あるいは、出撃日となった二十五日の欄に「楠公祭」という文言を記した後、万世を離陸後に知覧を経由した可能生も考えられるものの推測の域を出ない。いずれにせよ、日記に書き漏らした事実があったのか（＝知覧出撃）、それとも軍の公式な記録の方に誤りがあったのか（＝万世出撃）は、慎重に判断すべきであろう。

筆者自身は、軍の公式な記録に信憑性があると考えており知覧からの出撃であったと解釈する立場を取るが、今後、訓示を聞く姿が撮影された写真の書誌情報や、生田文献で記述が変化した理由をたどることができれば、当時の真実により近付くことが可能になると思われる。

〔注〕

注1 知覧特攻慰霊顕彰会・知覧特攻平和会館管理組合編『魂魄の記録 旧陸軍特別攻撃隊 知覧基地』知覧特攻慰霊顕彰会・知覧特攻平和会館管理組合、二〇〇四年（これまで六度の改訂再版があり、第六版は二〇一六年）

注2 万世特攻慰霊碑慰霊祭五十周年記念誌編纂委員会・万世特攻慰霊碑奉賛会事務局・南さつま市役所総務企画部編『特攻基地鎮魂の譜 よろずよに』万世特攻慰霊碑奉賛会、二〇二二年

注3 苗村七郎『慰霊戦記 よろずよに最後の陸軍特攻基地』民芸閣、一九七四年

注4 苗村七郎『万世特攻隊員の遺書』現代評論社、一九七六年

注5 苗村七郎『陸軍最後の特攻基地 万世特攻隊員の遺書・遺影』東方出版、一九九三年

注6 防衛庁防衛研究所戦史部編『戦史叢書 沖縄・臺灣硫黄島方面 陸軍航空作戦』朝雲新聞社、一九七〇年、※三七五頁の「この攻撃に参加突入した特攻隊は次の諸隊であった」という一文の引用文献は「『特攻戦没者名簿』とある（六三八頁）。

注7 生田惇『陸軍特別攻撃隊史』ビジネス社、一九七七年

注8 山口繁章編『知覧特攻基地戦没者慰霊祭 第六十回祭 記念誌』知覧特攻慰霊顕彰会、二〇一四年、一〇七頁

注9 加藤拓『陸軍航空特別攻撃隊各部隊総覧 第一巻 突入隊』二〇一八年

注10 後藤慶生『改訂版 流星一瞬の人生 後藤光春の実録―総集編―』一九九五年

注11 伊東一男『第六十六振武隊 伊東輝友の出撃について』特操一期生会編『特操一期生史』特操一期生会、一九九一年

注12 朝日新聞西部本社編『特攻おばさんの回想記 空のあなたに』葦書房、一九九〇年

注13 J A C A R (アジア歴史資料センター)、レファレンスコードJ14020169300、靖振第一八〇号、感状授与相成度件上申 昭和二十年五月二十八日、防衛省防衛研究所

知覧特攻慰霊顕彰会及び知覧特攻平和会館では、特攻戦没者の階級は戦死後の階級を用いており、後藤大尉・伊東大尉は出撃時には少尉であったことを付記しておく。

(たしろ・よしたみ 知覧特攻慰霊顕彰会事務局兼

知覧特攻平和会館管理語り部)

<要約>

昭和20（1945）年5月25日に特攻戦死した、第66振武隊の後藤光春大尉と伊東輝友大尉（いずれも戦死後の階級）の出撃基地は、知覧基地と万世基地のどちらであったのか、これまでの文献それぞれで異なって記載されるなど混在していた。その発端は、防衛研究所が発行した『戦史叢書』と、その後に編者が書いた『陸軍特別攻撃隊史』において記載が異なっていたことによる。

後藤大尉に関しては、戦後に弟の後藤慶生氏がまとめた冊子において、後藤大尉の日記における記載をもとに万世基地からの出撃であったことが訴えられたことにより、万世基地と解釈されてきた。一方、伊東大尉に関しては、戦後に兄の伊東一男氏が『特操一期生史』に寄稿した文章において紹介した伊東隊員の遺書の来歴により、知覧基地からとして解釈されてきた。このように、同じ部隊で同日に出撃した事実がありながら矛盾した取り扱われ方がなされてきた。

今回、筆者は、これまでの経緯を再検証した上で、アジア歴史資料センターがWEB公開している資料に第66振武隊の戦闘報告があり、後藤大尉と伊東大尉は知覧基地から5時30分に出撃した記録を確認した。

<Summary>

A re-examination of the sortie base of Captain Mitsuharu Goto of the 66th Shinbutai Unit

There has been some confusion as to whether Captain Mitsuharu Goto and Captain Terutomo Ito (both posthumous ranks) of the 66th Shinbutai Unit, who died during their kamikaze missions on May 25, 1945, sortied from the Chiran Air Base or the Bansei Air Base.

The confusion arises because of conflicting information between the “Military History Series” published by the National Institute for Defense Studies and the “History of the Army Special Attack Forces”, edited at a later date.

In a booklet compiled after the war by Captain Goto’s younger brother, Yoshio Goto, he claimed that based on his brother’s diary entries he sortied from the Bansei Air Base.

Conversely, Captain Ito’s older brother, who wrote in an article he contributed after the war to “History of the First Generation Special Flight Trainees”, stated that according to his brother’s final letter, Captain Ito sortied from the Chiran Air Base.

Even though the same unit was dispatched on the same day, contradictory information gleaned from various sources has led to this confusion.

After re-examining past historical records, I found a report on the battle of the 66th Shinbutai Unit published on the web by the Japan Center for Asian Historical Records, which confirms that both Captain Goto and Captain Ito sortied from the Chiran Air Base at 5:30 a.m.